

政務調査研究視察 報告書

平成19年11月15日提出

視 察 日	平成19年11月1日（木）～2日（金）
視 察 先	静岡県三島市
視 察 内 容	小規模特認校について
視 察 者	杉浦立美、鈴木 豊、山崎憲伸 3名

<小規模特認校について>

小規模特認校について三島市役所を視察いたしました。

小規模特認校制度とは過疎化や少子化などによる小規模校を活性化させるために市町教育委員会が特例で通学区域外から就学できる学校を指定できる制度です。現在、静岡県内では10校が指定を受けているがそのうちの三島市立坂小学校について説明を受けました。

まず、冒頭で10校のうち成功しているのはわずかに2校であるとのことであり、そのうちの1校が坂小学校であるとのことでした。

坂小学校が成功している理由の一つとして、学校の教育活動を支援する地域の力があつたということであり、坂地区活性化協議会が地域の市議会議員、歴代自治会長、PTA会長、校長、園長が構成員となつて結成され小規模特認校制度を後押ししたこと。

もう一つは小規模であることの特性をうまく生かした特色ある教育をしたことにあるとのことでした。

校区域外からの入学の条件として、1、公共のバスあるいは自家用車で送り迎え、2、1年以上で卒業まで在学すること、3、保護者は坂小学校での学校教育活動、PTA活動には必ず参加すること、4、卒業後は、居住地の中学校に入ることです。

制度開始当初は、1、不便な場所に通う児童がいるのか、2、通学中の事故、3、特別支援対象の児童が集まらないか 4、途中で戻ってしまうことはないか、などがありました。1については当初は確かに1人しかいなかったのが、徐々に増え現在は12人の児童が転入しています。2については入学の条件に公共のバスあるいは親に自家用車で送り迎えをしてもらうことを条件にし、3については確かに多くの相談があつたが、あくまで坂小学校ではきめ細やかな指導と自然や農業の体験学習を中心にした教育を行うということで、全部断つているとのことである。4については今のところ1人もいないそうです。

坂小学校の魅力としては少人数学級による一人一人へのきめ細やかな指導、体育祭などの行事における縦割りの異年齢集団による共同の生活などがあり、教師同士も少人数であるため意思の疎通が早く、会議なども少なく、その分児童への指導が多く行え、帰宅時間も早く教師自身の家庭生活も十分に行え、毎日が元気良く過ごせるというメリットもあり、現実に学力はあがっているとのことでした。

また、地域の協力体制があることで、種まきから収穫までの農業体験さらには地域



△熱心に説明する野口先生

三島市

のおばさんの手ほどきによる収穫した食物を使用した料理実習などによる食育学習の推進がはかれるなどの特色ある学校づくりができるということです。

英語活動も盛んで3年生以上は非常勤講師やALTなどによる英語によるゲームや日常会話を学習しており、USAワイリー校とも交流をして農家にホームステイをしにワイリー校の児童が来日しているとのことであり、費用は全てワイリー校の負担とのことです。

これはUSAの児童が日本の文化、富士山に非常に興味があるからではないかとの説明がありました。ちなみに坂小学校からは予算が無いとの理由でUSAには全くいかないそうです。

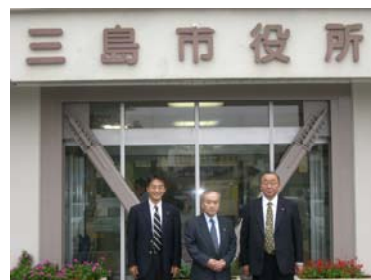
こういった学校生活を11月に公開して説明会を催しており、小規模校の魅力が徐々に浸透していくにつれて応募者も増えてきたとのことです。

成果としてはこの制度により現在12名の児童が転入しており、きめ細かな指導により、転校児童は楽しく生活しており、保護者にも好評。また、補充学習や学校行事、配布物に至るまで行き届いており、現在、非行、不登校ともに皆無であるとのことです。

また、今後の課題としては軽度発達障害児や不登校児の転入希望に関しての対応、通学に関して保護者の負担が大きい事などがあげられるとのことです。

余談ですが、今回担当の教育委員会指導課の野口先生はとても熱心に説明をしていただきましたが、あとで事務局の方に、彼はある荒れた中学校を立て直した伝説の教師であるとのこと聞いてなるほどと納得いた次第です。

教師のやる気がどれほど学校に影響を与えるのか野口先生のお話をうかがって少し判ったような気がしました。



△三島市役所にて

〔感想・岡崎市への反映〕

現在、岡崎市には額田地区の8つをはじめいくつかの小規模校がありますが、統廃合だけではなく、坂小学校のように小規模校ならではの特色を生かした教育を行ない、それに魅力を感じる児童、保護者が通える小規模特認校制度を岡崎市も考える必要があると今回の視察で実感いたしました。

政務調査研究視察 報告書

平成19年11月15日提出

視 察 日	平成19年11月1日（木）～2日（金）
視 察 先	埼玉県川口市
視 察 内 容	就学指定校変更・区域外就学について
視 察 者	杉浦立美、鈴木 豊、山崎憲伸 3名

<就学指定校変更・区域外就学について>

川口市が取り組んでいる学校選択制について川口市役所を視察いたしました。

川口市においては児童生徒の数は小学校が昭和55年、中学校が61年をピークに減少が始まり、平成10年、13年にはピーク時の約60%にまで落ち込み、現在はやや上昇傾向にあります。ピーク時に合わせて整備した校舎、教室に余裕ができそれを利用し、「これからの社会を担う川口の子供たちをたくましく、のびのびと育てるための環境づくりを行うことを目的に平成15年4月に中学校に、平成17年4月に小学校に学校選択制を導入いたしました。



△川口市役所にて

川
口
市

学校選択制とは通学区を自由化し、就学時に各児童生徒、保護者が就学先を自らが選べるという制度であります。

この制度の利点と致しましては児童生徒、保護者が自ら選ぶことにより、学校に対して愛着が湧き、保護者の関心が高まることや、学校、教師が選ばれることを意識し資質の向上に努め、特色ある学校づくりが推進され開かれた学校になることにあります。

欠点と致しましては過度の競争が起きないか、地域の連携が希薄にならないかなどがあげられます。

川口市においては、実際は約83%の児童生徒が区域内の学校に通っており、理由も基本学区である、近くだから、友達もいからなどの理由がほとんどを締めています。

しかし、中には区域外からの希望者が多く定員を越えた学校は抽選を行っているとのことでした。

区域外からの学校を選択した理由は、児童生徒は部活に関してが一番多く、保護者は落ち着いた雰囲気が一番に選んでいることは興味深かった。

全体的には教師も学校運営、授業への取り組みなども積極的になり、保護者も学校に関心が高くなったようであるとのことであるが、やはり、世間で心配されている、進学に有利な学校や部活での偏りはないのかという、こちらからの質問に対して、教育委員会はそれはありませんと回答されましたが、その後、川口駅まで送ってもらう道中で事務局の方に「教育委員会は言わなかったけれど、実は毎年抽選が行われている中学校は浦和高校（岡崎高校と肩を並べる超進学校）にたくさん進学する中学校であり、ある中学は部活で柔道が強く区域外の柔道の強い子が集まり、地域の子が選手

になれないという問題もあると教えていただきました。

学校が開かれることも大切ですが、教育委員会がまず情報を開いていただかないことには正しい情報が伝わらず困ったものだと思います。今回の視察においてこういった教育委員会の姿勢を垣間見せていただいたことは大きな収穫でありました。

〔感想・岡崎市への反映〕

川口市は面積 55.75km² であり岡崎市とは広さが違い、学校規模の格差も大きいので単純に学校選択制が行えるかは疑問であるが、地域をある程度限ればできないこともないと思われる。しかし学校間格差の問題は川口市を視察した限りでは解決できたとは思えず、一考を要するであろう。

市の各課にお願いしたいことは他市から訪れた視察者にはなるべく真実を伝えることを要望いたします。

何か行動を起こせばうまくいくこともあれば問題がおきることもあります。うまくいったことは誰にでもわかりますが大切なのは問題点を把握し分析してそれをしっかり報告することです。それを知らずに帰っていただいても視察に来られた意味がありません。

帰りに事務局の方からのお話がなければわたしたちは大きな勘違いをしてしまうところでした。

視察に関してはうまくいったことよりも問題点に重点をおくことが大切であると実感いたしました。